

公開講演会記録

国旗と国歌は国際理解の第一歩

NPO法人世界の国旗・国歌研究協会共同代表 吹浦忠正



小学生時代から70年

国旗との最初の出会いは、秋田の小学校4年生の時のことでした。担任の教師に「北ヨーロッパの国の国旗はなぜ、同じような十字架なんですか？」と尋ねたところ、返ってきたのは、「それも大事だが、もっと国語、算数、理科、社会を勉強なさい」。

今と違って、このまじめな少年は、先生のおっしゃるとおり、しっかり4科目を勉強したようです。すると、国旗に秘められた中身に惹かれ、いよいよ国旗が面白くなってくるのです。

大学に入学してすぐのことでした。私に、(社)日本ユネスコ協会連盟の機関紙「ユネスコ新聞」編集部から、世界の

国旗について連載しないかという嬉しい話が飛び込んできました。各国の国旗にはその国の歴史、民族、宗教、産業、理念・信条・目標、動植物、世界遺産などが集約的に納められているのはもちろんですが、互いにいろいろな関係があり、分類して覚えることは容易です。そんなことから、この連載は、自分でいうのもなんですが、結構、評判を呼び、平凡社や帝国書院で国旗の本づくりに協力させていただくことにもなりました。

そんなとき、今、NHK大河ドラマ「いだてん」で阿部サダヲが演じている田畑政治(まさじ)東京オリンピック組織委員会事務総長から、「会いたい。車をまわすから来ないか」との電話が入りました。早稲田の正門前に公用車がやってき、初め

て黒塗の車というものに乗せてもらいました。行き着いたのは、旧赤坂離宮、今の迎賓館です。小学生のころ、両親に連れられて東京見物に来たとき、外から見て、「日本の離宮なのになんで洋館なんだ」と変に少々がっかりした(今は和風の建物を併設)のを思い出しましたが、入ってみると、絢爛豪華。圧倒されるものがありました。学生服の私にはいかにも不釣り合いの雰囲気でした。正面玄関から入って、1階左に事務総長室があり、田畑事務総長(水連会長、元朝日新聞常務取締役)と松沢一鶴事務次長(前東京都教育長)がおられました。

田畑事務総長との面接で即決

「訊くがね」。

いきなり上から目線です。

「外務省や日赤、ユネスコなどによると、キミは国旗の専門家だそうだが、イギリスの国旗へユニオン・ジャックだね、あれが付いている国旗はほかにどんな国があるのかね」。「……」。「わからんのかね」。

質問のばかばかしさに、生意気盛りの青年は不愉快そうに、重い口をゆっくり開けました。

「Bから始まる国だけでもバハマ、バルバドス、バーミューダ……」。

お2人を見ると、「なんだ、こいつは。

こんな国があるのか」という風情。

「それと香港、北ローデシア、ローデシア……ま、もちろん、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、南アフリカもそうですが、それがどうしましたか？ そうそう、ハワイの州旗にもユニオン・ジャックが付いてますよ」。

今度はお2人が「……？」でした。そこで田畑事務総長はガラッと態度を変える。話が早い。「判った、判った。とにかく、アジア大会での失敗を繰り返してはいけない」。

「1958年の東京大会。中華民国（台湾）の国旗を表彰式で逆さまに掲げただんてしたよね」「うん、そんなことま

で知ってるのか。この松沢くんが直接の責任者だったんだが、2人で、新橋第一ホテルに、向こうの選手団長を訪ね、土下座して詫びたんだよ」。

言葉を継いで松沢事務次長が、「自慢じゃないが、先にも後にも土下座なんぞしたことがない。どうしたらいいのかわからずに靴を履いたまま四つん這いになった。おかげで、捻挫したらしく、参ったよ」。

最後は、田畑事務総長が、「とにかく、オリンピックまであと2年半、君の役目は、正しい国旗を正しく掲げる、それに尽きるんだ。いいね」。

「はいっ！」。最後は素直に返事して、お2人と握手して立ち去りました。

田畑事務総長らの首を差し出して オリンピックを守った

その直後に、インドネシアの首都ジャカルタでアジア大会が開催されました。「北京」と親密なスカルノ大統領はIOC（国際オリンピック委員会）加盟国であり、当時は国連安保理常任理事国でもある中華民国の選手団を招聘せず、また、インドネシアが世界最大のイスラム人口を抱える国として、アラブ諸国と親密なこともあり、同じくIOCのメンバーであるイスラエルにも招聘状を送らなかつ

たのです。

当時のブランデーJIOC会長は、「インドネシアのやり方は許し難い。IOCはこの大会を認めない。参加したNOC（国内オリンピック委員会）や選手は、以後のオリンピックへの参加は認められない」。すでにジャカルタ入りしていた組織委の津島壽一（じまひさ）会長（参議院議員、元蔵相、元防衛庁長官）、田畑事務総長らは、通信事情の悪い時代に東京とやり取りし、指示を待ったが、結局は「現地判断に任せろ」ということになり、日本選手団は「ここまで来て、親日国インドネシアから引き返すわけにはいかない」と参加に踏み切ったのでした。

国際ウェイトリフティング連盟（IW F）は厳しく参加拒否を打ち出したため、この競技だけは日本選手も参加しませんでした。しかし、この決断で、日本は、2年後に迫った東京五輪を返上しなくてはならないかも、という瀬戸際に立たされたのです。そこで、組織委やJIOC（日本オリンピック委員会）は外務省などと緊密に相談し、「大人たち」がすごい決断をしたのです。「津島と田畑が勝手に参加したのだから責任を取らせる」として2人を解任し、五輪開催を守ったのです。ですから、私は、後任の与謝野秀事務

総長（鉄幹・晶子の次男）から辞令をもらいました。前職はスペイン大使、五輪後はイタリアの大使になられた方で、のちに首相になる中曽根康弘衆議院議員の秘書を経て政治家になった馨のご尊父です。

一番困ったのが「日の丸」

それはともかく、日英米仏ソなど内外の16の関係書籍や法令を基に、各国旗を製図化しました。巣鴨の旅館にスタッフと3人で5日間泊まり込んで、頑張りました。「仕様書」や「稟議書」などという言葉さえ知らない若者、もといバカ者は、その後も、自主的に、組織委で今のブラック企業並みに働きました。組織委全体がそういう雰囲気でした。

それを基に各国旗の試作品を作り、各国のNOCに航空便で送るのです。「もし、この色で不都合でしたら、添付した色見本からお選びいただきたい。それでもご満足いただけない場合は、色見本をお送りください。また、貴国の国旗に関する法令、政府が発行した国旗のガイドブックのような資料がありましたら、お送りいただければ幸いです」と、書き添えました。

なかなか返事は来ません。郵便事情もありましたが、各国NOCには自国の国

旗について公式に回答できる人がいるわけではないのですから、無理のないことです。緑・白・オレンジの縦三色旗であるアイルランドとのやり取りは8回に及び、その苦労話は、昨年からの、小学校6年生の「道徳」の教科書（日文）に、私が主人公になって4ページも掲載されています。このほど、来年からさらに4年間、掲載されることになり、この「不道德人間」は当面、泥酔も厳禁という、不自由な？生活を余儀なくされています。

閑話休題。実は、一番困ったのは、日本の国旗です。どこに相談に行ったらいいのでしょうか。まずは各国同様、JOCに持ってゆきました。が、「門前払い」。次に文部省体育局、外務省、防衛庁、内閣官房をまわりましたが、らちが明かず、国会議事堂と首相官邸で実際に掲げられている国旗を、製造したメーカーに行ってみせてもらいました。すると、赤の色合い、円の大きさ、縦横比などが意外にもバラバラなのです。そこで、（財）日本色彩研究所（色研）と資生堂研究所に相談しました。色研は、無作為に500件の家庭や企業を訪ね、そこが所有ないし使用している「日の丸」を測定し、色見本を表に出したのです。その上で、色彩の塊から外れている色票を外し、残り

の平均値を算出するということをしてくださいました。

資生堂は、当時、すでに約2000種類の口紅を試作しており、「紅」という色には精通しておられました。白については、東洋陶器（現OTTO）からも助言をいただきました。「どなたでも毎日、気持ちよく使用される白はどんな白でしょうか」。その結果、白はほんの少しアイボリーの入ったものを選びましたが、後に、長野のオリンピックでは雪や氷など背景が白ですから、白度を上げて、純白を選びました。

1999年の「国旗国歌法」でも赤は「紅」と規定されましたが、この法律で廃棄されるまで有効だったのが、1870（明治3）年1月27日（旧暦）の太政官布告第57号「商船規則」。この布告でも「日の丸」の色は「紅」と決まっていたのです。JIS（日本工業規格）では「紅とは何ぞや」が数値としてhcolor: #c00000と厳密に決まっています。しかし、日本の国旗だけそうすることもできず、最終的に東京五輪では、すべての国旗の赤は同じ明度、色相、彩度の赤とし、その原反を大量に造って、切り抜き・縫製で製作することにしました。

1964年当時は、戦前、戦中、戦後

に大量の「日の丸」や「旭日旗」を作った職人たちがまだまだ健在でしたので、東京・越前堀の日本信号旗、大阪の国際信号旗の2社と、東京旗商工業組合が落札し、自衛隊やボーイスカウト、ガールスカウト、スポーツ少年団などの大変なご苦労も積み重なって、結果的に、「正しい国旗を正しく掲げる」ことができました。しかし、残念なことにこの3メーカーは、今は存在していません。

来年の東京五輪では、去る4月22日に国際入札した結果、アテナという日本のメーカーが208か国（地域、206のIOC加盟NOCとパラリンピックにだけ参加する澳門とフェロー諸島）の約1万3000枚の国旗の製作を落札しました。老生も入札の審査員をしましたが、このペースで大会に間に合うのかと日々、本気で心配し、隔週くらいこのペースで開かれる、組織委とアテナの「連絡会」に参加して指導しています。

耐用実験で旗布を決定

そうそう、旗布のことを忘れていました。今まで日本で開催された3回の五輪大会はエクスランという東洋紡が開発した化学繊維でした。1956年のメルボルン、2000年のシドニーなどでは

「羊の国」オーストラリアらしく羊毛^{ウール}の旗布でしたし、1984年のロサンゼルス、1996年のアトランタ大会はナイロンでした。

1964年の東京大会ではこの3種類を、バンディングという旗布に織ったスベイン、メキシコ、グアテマラという紋章付きの国旗を試作して、国立競技場に15日間、掲揚して耐用実験をしました。その結果、ナイロンは9日目の雨で「染めが泣く」といって色が流れ、11日目にはウール地の「流れ」（裾）が破れました。かくして、風合い、強度、染色、費用、在庫などを総合的に判断し、エクスランを採用しました。しかし、それまでには、東京五輪開会式で選手宣誓をした体操の小野喬、「フジヤマのトビウオ」と称えられた古橋廣之進の超有名アスリートであるお2人が、東レと大同毛織の営業マンとして、私のところに頼み込みに来るといった場面もありました。小野さんは郷里の大先輩であり、秋田弁を交えての売込みには閉口しました。他方、生来、泳げない私にとって古橋さんは「憧れの人」でした。今にしてみれば、サインでももらっておくんでしたね（笑）。

いよいよ明日が開会式

1964年10月10日、「世界中の青空を集めたような快晴」と、NHKの北出清五郎アナが実況中継したように、当日は、雲一つない素晴らしい天気でしたが、前日は夕方から大変な豪雨でした。「明日の開会式は消えた」「オジャンだ、オジャンだ」と落語の「火焰太鼓」のような話をしながら、組織委の若者たちが誘い合い、四谷で飲み、新宿で食事し、最後は、高田馬場で飲みなおしました。

午前2時過ぎだったでしょうか、外に出たら、月はなかったですが満天の星！今でも酔眼で見たあの星が頭に焼き付いています。そこからどうやって、午前6時の集合時間までに国立競技場に着的いたかは思い出せないのです。制服を着用して集合したので、たぶん組織委の会議室あたりで少しは寝たのかもしれない。

驚いたのは、田畑前事務総長がスタジアムの貴賓席に一人、ポツンと座っておられたこと。東京にオリンピックを招致した最高のリーダーでありながら、この日のために事務総長としてのクビを差し出した人の感懷や如何？ その姿に酔いも覚めました。

開会式での行進はギリシャが先頭。以下、アフガニスタン、アルバニア、アルゼンチン……という具合に英語のアルファ

ベット順で、最後は開催国・日本。これで計94か国でした。

インドネシアの選手団は、羽田空港で待機したのですが、IOCが参加を認めずそのまま帰国、北朝鮮の選手団は、九段の朝鮮総連で待機したのですが、同じく全員、新潟に戻り、万景峰号で帰国。女子800メートルで世界記録を持つ辛金丹選手は先に「脱北」していた父親と総連で15分間話をするという再会ドラマもあったのです。

開会式での私の役割は、競技場裏正面に並ぶ参加国旗がきちんと掲揚されているかを確認することや、各国の旗手がそろっているか、奉持に際して上下を付け間違えたりしていないか、といったチェックでした。幸い、自衛隊練馬師団のみなさんが、実に、完璧に準備してくれました。それでも因果なもので、あれから55年も経った今でも、当時のビデオや映画が放映されると、大丈夫かとハラハラしてしまうのは、習性か、お許しください。間違いは、大会終了後、私が任を解かれ、優勝者の名を刻んだ銘板がスタジアムに掲示されたとき、インドの国旗が逆掲揚されたのを報告書で見ただけでした。

国旗が逆というのは、2016年のリオデジャネイロ五輪でも、ロシアやチェコ

の国旗が競技場前の掲揚塔で逆さまになっていたのを、私自身がリオで見つけました。それよりも、室内競技での表彰式で、中国の国旗のデザインが違っていたのには驚きました。紅地のカントン（左上部）に共産党を表す大きな黄色い星を置き、その右に、労働者、農民、知識人、愛国的資本家を表すと説明されている、4つの小さな同じ色の星、これが中国の国旗「五星紅旗」なのです。しかし、本来は、4つの星の一端が大きな星に向いていないといけないのに、全部、上のほうを向いている、すなわち、人民が共産党から遊離しているようなデザインになっていたのです。

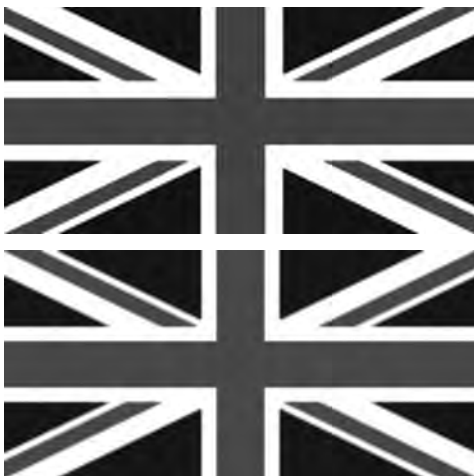
中国の総領事はおそらくは「怒发冲天（怒髪天を衝く）」形相だったのでしょうか、リオ五輪の組織委に怒鳴り込んできました。後でその旗を見せてもらったところ、「中国製」と書いたラベルが付いていました（笑）。それにしても国旗は検品が大事です。「東京2020」に際しては1万3000流の国旗をこの目で点検するつもりです。中国で思い出すのは、アジアで初めてという、前の東京五輪の7日目、かの国が初の核実験を行ったことです。このときは組織委のスタッフ全員が、怒り心頭でした。爾来、私は「日中友好」という言葉に容易には浮かれることができません。

なっていました。同時に、ソ連空軍機が頻繁に日本に接近し、空自がその都度、スクランブルをかけたのでした。

先進諸国の国旗のいわれ

戦前の教科書では、主要国の国旗とそのいわれやよって来る由縁をきちんと指導していました。きょう、ここでも少し解説したいと思います。

国旗でしばしば混乱するのは英国旗（ユニオン・ジャック）です。これに上下があるということがなかなか理解していただかず、都内でもたびたび、逆掲揚をしているのを見かけます。さて、この2つ、どちらが正しい英国旗でしょう？



（正解は本稿末尾に）

英国はイングランド、スコットランド、アイルランドが合併してできた国ですが、その都度、国旗も合体したのです。それによって、青地に白の斜め十字のスコットランドの旗が、アイルランドの白地に赤の斜め十字の旗に隠れないように、赤の斜め十字を左回りに回転させたのです。

フランスの国旗は周知のデザインですが、青・白・赤の縦三色旗の色が3等分かとなると結構、ややこしいのです。今では、陸上では3等分、商船や軍艦が海上で使用する場合には、30:33:37になっています。「そのほうが海では3等分に見える」というのです。いかにも美の国フランスの面目躍如といったところでしょうか？

ドイツの国旗は、1871年の統一（第2帝政）で黒・白・赤の横三色旗になりましたが、第1次世界大戦で敗れ、「ワイマール共和国」時代は今と同じ、黒・赤・金の横三色旗となり、ナチス政権で「鍵十字旗」となり、第2次世界大戦で敗れると、西ドイツはワイマール時代の国旗に戻ったのですが、東ドイツは、ややあって、それに労働者を表すハンマー、農民を表す麦の穂、知識階級を表す分割器を配した紋章を付け、1989年の再統一で、全土が黒・赤・金の三色旗になりました。先進国でもっとも国旗が変わった

国はドイツです。

緑・白・赤の縦三色旗であるイタリアの国旗は、日本中で、おそらく「日の丸」を凌ぐほどの数が見られるのではないでしょうか？ これは、先の大戦でイタリアが43年に連合軍に降伏した際、神戸港に親善訪問をしていたイタリアの2隻の軍艦が「キングストン弁」を抜いて自沈し、全員が捕虜になったことに由来するのです。将校や水兵の中には、シベリア鉄道で中立国ソ連を経て帰国した者もいましたが、多くは、連合艦隊に要員として乗り組んだのでした。そのとき、2人のシェフが宝塚と神戸で、イタリアの国旗を掲げてレストランを開業したのが始まりで、南青山のイタリアレストラン「アントニオ」の先代がその人です。

オランダの国旗は赤・白・青の横三色旗。16世紀後半からは世界に翻った国旗でした。ナポレオンに支配された時期には、アフリカのある砦を除き、長崎の出島にだけは掲揚され続けていました。17世紀末、250人を率いてオランダを訪問したロシアのピョートル大帝はオランダがこの旗の下、世界に進出していることに感銘し、自国でもこの旗をと、色の順番を白・青・赤にした横三色旗を採用したのです。

ペリー来航ショックで国旗を決めたが

アメリカは国旗も国歌も「星条旗」。1783年のきょう（7月4日）に独立したときの州の数が紅白13本の縞で表され、時の州の数だけ星がカントンに並べられているのです。

ですから、1853年、ペリー提督が浦賀にやってきたときは、その直前にカリフォルニアが州に昇格し、31星の「星条旗」を掲げてきました。これに対応して警備に当たった会津、川越、忍、彦根の各藩は自藩の家紋の付いた幟を掲げ、国旗を掲げませんでした。より正確に言うなら、日本には国旗としてきちんと決められたものがなかったのです。当時は、幕府の御用米を運搬する船の旗印が、1〜5個の「日の丸」を幟に仕立てていました。いよいよ開国となって、老中筆頭の阿部正弘が中心になり、「わが国でも惣船印が必要だ」ということから、「徳川の先祖にあたる新田家」の家紋に由来する「大中黒」（白・黒・白の横3分割旗）を幕閣が決定しました。

ところが、「これでは日本中が喪中になる」といったかどうかはわかりませんが、薩摩の島津斉彬と水戸の徳川斉昭が異を唱え、幕閣が再度検討して、「日の丸」

を採択したのでした。ですから、箱館戦争では榎本武揚ら旧幕府軍が「日の丸」を、明治新政府軍が「旭日旗」を用いていました。

その終戦から10か月余りを経た1870年2月27日（太陽暦）、太政官布告で商船用の国旗として「日の丸」が定められ、明治政府が旧幕府を継承する正当なものであるということを示す役割を果たしたのです。もっとも、その布告では「縦横比7：10、円の大きさは縦の5分の3」まではすんなり理解できるのですが、「円の中心は横の100分の1、旗竿側に寄る」という内容なのです。これにはおそろく、フランス人のお雇い外国人（モンブラン伯？）の助言があったのではないかと、私は推測します。当時、ナポレオン3世による「第2帝政」時代であったフランスでは、国旗の3色が前述のように不等分とするのが普通だったのですから。

今の「君が代」は2代目

国歌「君が代」にはもっと色濃く、外国人の影響がみられます。1869年、英国のヴィクトリア女王の第2王子アルフレッド公が、日本を迎える最初の貴賓としてやってきました。このとき、英国軍楽隊長であったウィリアム・フェント

ンが作曲したのが初代の「君が代」です。歌詞は、大山弥助（後の大山巖元帥）が薩摩で知られていた、『古今和歌集』に由来するものを援用しました。国歌となっている中では、世界最古の歌詞（短歌）なのです。



新藤昌子さんに歌ってもらいましょう。
〈新藤が披露〉。

このように全く西洋音階の曲で、日本には「ドレミ」の音階が普及する以前でしたので、この曲は決して愛唱されることはありませんでした。そこで、1880年になって、宮内庁楽部の若き伶人・奥好義（後の「婦人従軍歌」の作曲者）がフェントンの曲を頭に置きながら、同じ音域、酷似したリズムの邦楽調の、現在の曲を作り、上司の林廣守の監修を経て、現在の「君が代」になったのでした。フランス、中国、アメリカのような戦争に由来する歌詞の国歌ではなく、日本

国と日本国民統合の象徴である天皇が永遠たれ、すなわち、日本国が永遠であることを祈念するすばらしい詩であり、曲ではないかと思料します。

国際社会においては、トランプ大統領ではないですが、「アメリカ・ファースト」、互いに利益追求が第一であるのが現実です。グローバル化が進んでいるとはいえ、世界は基本的に1648年のウェストファリア条約以来の主権国家から成り立っていることに変わりありません。ですから、トランプ大統領はメキシコとの間に「壁」を構築しようとし、英国のメイ首相はBrexitの結論をどうまとめるかで苦心し、ついに辞任となったのです。

そうした中で、法や正義さえ、しばしば蔑ろにされるのは遺憾とするところですが、理想と現実の乖離は何事にあっても完全に解決はできないのではないでしようか。

国旗や国歌は、最初に申し上げた通り、その国の基本を詰め込んだものと理解し、それを知り、学ぶことは、その国を知る第一歩だと確信します。それによって、お互いに互恵の気持ちを持ち合わせることで、平和の基本であると私は考えます。残念なことですが、日韓両国は昨今、厳しい関係になってきています。日本が

らの修学旅行生や観光客の数は激減しています。部品の輸出を止めるという事態にもなっています。しかし、お互いに「引越できない関係」にあるのですから、落ちついた交流や協力し合う関係に戻りたいものだと思います。

そうした中で昨年の平昌冬季オリンピックにおける、小平奈緒と李相花の名勝負、そして試合後の寄り添う姿は素晴らしいものでした。五輪で連勝している李、その前の組で走った小平は36秒94の五輪新。そのとき、騒然とする場内の観客に向かって、小平は口元に指を押し立てて、次に出場する李たちのために静かにしてほしいと願いを込めたのです。結果はわずかに0秒39の違いで小平が「金」。

これまでの健闘を讃える李相花コールが続く中、「太極旗」を持った李は、場内をゆっくり一周。それを迎えた小平は文字通り「日の丸」を背負って、李の健闘を讃えてハグしました。ぎくしゃくしていた日韓関係が霞むような、2人の友情物語に私は大いに涙したのです。

国旗はときに国威発場の道具にもなりまします。しかし、他を排除しない、啓発されたナショナリズム(enlightened nationalism)はエネルギーの根源になるのではないでしょうか。「ニッポン、チャチャチャ」の観衆

の嬉しそうな姿に、こっちも笑顔になるのは自然なことだと思います。

オリンピックはしばしば政治の影響を受けて来ました。平昌五輪では、南北が急遽合同チームで参加し、入場行進では白地に朝鮮半島と済州島だけを描いたIOC公認の旗を使いました。しかし、観客席では、韓国の人も、北朝鮮からの「美女軍団」も鬱陵島や竹島(韓国では「独島」)をも描いた旗を振って応援していました。

「東京2020」は私にとっての国旗を担当する4度目のオリンピックですが、これを機に、日本で国旗や国歌を通じて、国際理解や友好が進み、互いに尊敬したい、平和な社会へとつながるきっかけになればと願うばかりです。

(英国旗は上側が正しい)。

〈注〉講演では、オペラ歌手で約100か国の国歌をその国の言葉で歌えるという新藤昌子さんが、講演中に9か国の国歌を原語で披露してくれました。

(2019年7月4日・公開フォーラム)

筆者略歴(ふきくら ただまさ)

1941年、秋田市生まれ。早稲田大学政経学部在学中にオリンピック東京

大会組織委員会専門職員として国旗を担当。埼玉県立大学教授。札幌、長野の冬季五輪でも国旗に関わる。

著書は『国旗で読む世界史』『国旗で読む世界地図』『オリンピック101の謎』『オリンピックでよく見る、よく聴く国旗と国歌』など多数。「世界一受けたい授業」「NHKスペシャル」など出演多数。NHK大河ドラマ「いだてん」で国旗考証を担当中。新藤昌子とともに全国各地の小中学校などで、国旗・国歌の出前授業を実施中。

新藤昌子(しんどう まさこ)

NPO法人世界の国旗・国歌研究協会共同代表。ソプラノ・リリコレッジェーロ。桐朋学園大学声楽科卒業、同研究科修了。多くのオペラに出演。2008年より国歌による国際友好親善活動を開始。東京都人権週間講師として「音楽と人権」をテーマに演奏と講演を行う。17年12月にはリサイタルを開催。地元、調布市で「国歌合唱団」を指導し、演奏。20年3月1日に紀尾井ホールで「世界の国旗・国歌コンサート」を開催予定。